



第 3 号

埼玉大学教育学部
同窓会事務局

第三回総会開催される

同窓会名を櫻(けやき)会に

同窓会の名称が、埼玉県の木、大
学前の道路・埼玉大通りの並木などに
ちなんで「櫻(けやき)会」と決ま
りました。会報の題字が、今回から
「けやき」になったのも、そのため
です。「櫻会」の名称は六月十二日



矢沢・田代・岡崎先生を囲む
歴史学コースの同窓生

(土)に開催された第三回総会で決
議されました。

これまで二回の総会は、大宮パレ
スホテル、池袋サンシャイン・プリ
ンスホテルでそれぞれ開催されてき
ましたが、第三回は浦和市下大久保
の母校キャンパス内にある大学会館
を会場にしました。

交通の便は悪いものの、思い出の
キャンパス内で開催するので、総会
を機に母校を一度訪ねてみよう!と
思う参加者も多いのではないかと、と
いう「読み」でしたが、総会、それ
に続く懇親会への出席者は、先生方
を含めて七十六人でした。

総会は二部構成で、第一部は午後
二時半から、同会館三階小集会室で
行われた記念講演。矢沢利彦名誉教
授が「お茶を中心とした東西文化交
渉」の題で約一時間半、講演されま

した。

午後四時から三階大集会室で開か
れた総会では、まず武井尚会長(70
年卒)から、初めて開催した就職相
談会など、九二年度の活動報告が行
われ、続いて石田義明副会長(75)
が会計報告を行い、それぞれ承認さ
れました。その後、役員改選、九三
年度活動方針などが論議されました
が、役員は会長以下、全員留任と決
まりました。好評だった就職相談会
は、時期を早めて九三年度も引き続
き開催されることになりました。

新たな議題として九四年度以降の
会費納入方法(別掲参照)が櫻井雅
英副会長(74)から、さらに同窓会
の名称が岡田道程常任理事(76)か
ら、それぞれ提案され、原案通り承
認されました。「櫻会」の名称由来
など詳細は別掲してあります)

総会後の懇親会は会場を二階レス
トランに移し、理事の松岡眞知子さ
ん(77)の司会で和やかに行われま
した。冒頭、小松寿雄学部長があい
さつの中で、近く教育学部が実施す
る「教官公募」の「特ダネ」を披露
すると、マスコミ在籍の同窓生が色
めく?シーンもありました。

しばらく懇談の後、出身コース別
に先生を囲んで記念撮影が行われま
したが、出席13コース別の出席者は
次の通りでした。日文Ⅱ7、歴史Ⅱ

10、自由Ⅱ4、現社Ⅱ12、システム
Ⅱ6、国関Ⅱ9、米Ⅱ1、文人Ⅱ3、
哲学Ⅱ3、中Ⅱ3、コミュニケー
ションⅡ1、地理Ⅱ2、独Ⅱ1。ま
た、先生方は小松学部長、記念講演
をしていた矢沢名誉教授のほか
かに、阿部年晴、崎勝世、小川瑞穂、
波、大澤正昭、新井壽郎、岩本泰
小菅稔、関口順、田代脩、西田馨、
宮原朗の各氏の計十三人と、前回総
会の倍以上の出席をいただきました。

最後に、秋山茂美子さん(88)と
森田文さん(92)が出題者になっ
ての「〇×クイズ」問題は埼玉にちな
んだものが多く、与野市在住の蓬田
将代さん(74)が地元の強み?を発
揮して勝ち残り、優勝賞品の宝くじ
三十枚が贈られました。クイズでは、
コーヒー豆、CD、Jリーグ入場券、
宿泊割引券など、同窓生から多数の
賞品を提供されました。

総会、懇親会へは、遠く大阪・吹
田市(酒井壽太郎さんⅡ70年)水戸
(内海和之さんⅡ77年)沼田(北雅
文さんⅡ75年)からも参加していた
だきましたが、全体では同窓生の出
席は六十人余に止まりました。

会の名称も「櫻(けやき)会」に
決まり、同窓会活動もこれからが本
番です。総会に限らず、皆さんの積
極的な参加をお待ちしています。

〈同窓会会長あいさつ〉

櫻(けやき)会会員の皆様の一層の御協力を

武井 尚



同窓会は設立三年目を迎えました。三年という年は昔から諺などでもいわれているように、区切りとなる

年限を意味することが多いようです。本会も今年度は一つの節目となる年になるであろうと思います。

一九九三年度総会は埼玉大学学生会館で開催され、本会の名称が「櫻(けやき)会」とすること、会費納入方法を従来の郵便振替・銀行振込から、会員の銀行預金口座より自動振込へと変更することが承認されました。新会名の決定や会費納入方法の変更が同窓会発展の重要な契機となることを念願するものであります。さて、昨年発行の「同窓会だより」第二号で、本会の運営には財政基盤の確立、会費納入会員の増加の必要性が述べられていますが、現状は決して満足できる状況ではありません。しかし、その状況に萎縮することなく、「同窓会だより」の発行

就職相談会、名簿管理、名簿追補版の配布などの事業を進めてまいりました。とくに本年二月六日に開催された

就職相談会は新四年生の多数の出席を得、成功裏に終えることができました。厳しい就職戦線が予想されていたので質疑応答が活発に交されました。また、女子学生の真剣な眼差しが印象的でありました。

ところで、同窓会は名簿が刊行されたことで、その役割は終了したと考えられがちです。確かに名簿刊行は同窓会の主たる事業の一つです。しかし、名簿刊行に費した会員の膨大なエネルギーを無にすることなく、名簿という会員の基礎データの管理を継続していくことこそ、同窓会に課された最大の事業ということが出来るかと考えます。この地味な事業に対して、少しでも会員の皆様に御理解いただければと思う次第であります。

三年目を迎えた同窓会「櫻会」はこれから会費納入方法の変更に伴なう多くの準備事務が控えております。会員の皆様の御支援・御協力をよろしくお願い申し上げます。

《先生方のメッセージ》

やぶれ傘

岩本 泰波

である

◇失望と後悔と みんな自負心(うぬぼれ)の成れの果て

◇この手だけでは開かぬ人生という重い扉

◇間違ひなくこれが自分だと思っても 鏡の中の顔のように 左と右が反対なのかも知れない

◇言ってはならぬ嘘がある 言わねばならぬ嘘がある

◇ずぶ濡れになってしまおうと 「傘を忘れた」という後悔も消える

◇短針の動きは見えないけれど 秒針のように消えているひとのいのち

◇謙遜という いとも根深いこころの誇り

◇同じような悩みをひとの胸に発見すると どうして救われたような気になるのだろうか

◇人生という砂時計は ひっくり返してもう一度というわけにはいかない



岩本先生と哲学・思想コースの同窓生

◇雨はいつの間にか霽(は)れるもの

◇同情の仮面のなかで ひそかに笑みをもつ悪の根の深さ

◇鬼灯(ほおずき)はもまれもまれて 臓腑(はらわた)を出してもらわねば 鳴るようにはならない

◇ひとの間違いを責める心と 自らの義(ただし)さを誇るころとは
一卵生双生児

◇論理は頭脳から生まれるが 真理は頭脳を包む

平成五年六月に教養学部同窓会が開かれた時に、講演を行わせてもらいました。みなさまの期待に答えることができたかどうかわかりませんが、わたしが話をするというので駆けつけてくれた何人かの同窓生に会うことができて嬉しく思いました。またかつての同僚であつた諸先生にもお目にかかることができて、懐旧の情にひたる幸福をもちました。

退任してから十五年近くになりましたが、この間、在任中に始めた研究の結果を整理して漸次公刊し、平成六年にはほぼその業を終える予定です。八十歳で一応自分の目的とした仕事を成就できることになりました。幸福な男だと自分のことを考えています。教養学部の教壇を右に行ったり、左



告 白 報 告 利 彦 沢 矢 (埼玉大学名誉教授)

に歩いたりして固まって来た想をまとめたのですから、すべて教養学部の教官と学生の諸氏のお陰であると言えます。心からお礼を申しあげます。ちょうどこの時を待っていたように、肩、肘、首、膝、足首、腰といったすべての関節を痛め、耳はすっかり遠くなりました。勉強のしすぎなどとはめてくださる方もいますが、実態は動物としての寿命が尽きかけているのです。眼だけではどうしてか医者も驚くほどいいので助かっています。テレビでスポーツを見るのは大好きですし、『日刊スポーツ』はいまもなお宅配を受けているほどですから、これからはサッカーでも観て過ごしますが。浦和が猛烈に弱いのが困ります。

◇嬉しくてたまらぬから 犬ははげしく尻尾を振る
そんなよろこびを持ってなくなると人間は尻尾を喪ったのかも少し
れない
(埼玉大学名誉教授)

教養学部で

定年を迎える

林 進



同窓会には、総会には、いつも出席したいと思しながら、何かと支障があつて欠席することになり、失礼しています。来年三月末には、私は定年退職を迎えようとしています。私が教養学部の現代文化・マスコミコースに着任したのは昭和四五年で、すでに二十三年を経過しました。埼玉大に来る前に、いくつかの大学などの勤務を変えていたので、埼玉大に定年まで勤めることになろうとは、当時は、考えていませんでした。他大学からの誘いもなかったわけではなかったのですが、定年まで勤めつづけることになったのは、結局、私にとって教養学部の居心地がよかつたからと考えています。

まず、教養学部はいろいろなコースに分れていましたが、教養学部本来の学際性、広域性を保持していたことです。前任校の千葉大人文学部

では学科による専門分化が強かつたのとは大きく異なっていました。学部の規模も一体化に適したものでした。

つぎに、教養学部は基本的には自由な学風で、よくある派閥性も一部を除けば見られず、政策科学系の分離とともに、学部全体で親しい交流がありました。

また、学生諸君も一貫して教養学部の特徴を活かし、その能力を伸べて私たち教師を支えてくれました。学生や卒業生とのパーソナルな交りは私の生きがいの一つとなつています。

もう一度結婚するとすれば...というたえがありますが、私にとってもう一度勤めるとすれば、やはり教養学部ということになるようです。
(埼玉大学教養学部教授)



感謝と願い

宮原 朗

有志の先生方とともに同窓会創設を呼びかけ、各コース二名ずつの卒業生の皆さんにお集まりいただいたのは、古い手帳を繰ってみると一九九〇年三月二十四日のことのようにです。それ以来、困難な諸々の条件をものともせず、期待を上回るペースで事が運び、一年後には早くも創立記念の式が盛大に挙行され、次いで本格的で綿密な名簿も発行されるに至ったのは、ひとえに有能な幹事の皆さんの献身的な努力の賜物であり、この機会に改めて心から敬意を表したいと思います。



宮原先生とドイツ語圏文化コースの同窓生

その後の活動にも、めざましいものがありますね。三月末、巣立ちゆく後輩たちに同窓会長が贈る饒の言葉、しばしば発行される内容ゆたかな『同窓会だより』、そして在学生待望の就職説明会等々、いずれも本当に有難く、感謝に堪えません。しかし、やはり何よりも楽しいのは、恒例となった年一度の総会・パーティー。数限りない嬉しい再会が、グラスの酒と相まって快い酔いへ誘います。

小生もいつしか年をとり、あと二年半で定年を迎えますが、退職後も同窓会パーティーに出れば皆に会えると思うと心強く、またほのぼのとした気分になります。

最後に、小生のコース（ドイツ文化、改めドイツの文学・言語、再度改めドイツ語圏文化コース）の卒業生諸君へ。総会・パーティーにぜひ多数参加して下さい。小生は次回も必ず出席するつもりです。先回は一九八四年卒の小野崎聡子さんが来てくれて、嬉しかった。では、「けやき会」パーティーでの再会を期してこの辺で擱筆としましょう。

（埼玉大学教養学部教授）

《声の欄》

シンガポールより

瀧ヶ平 健 一

仕事の関係でシンガポールに赴任して早七ヶ月。毎日三十度を超える厳しい暑さが続き、オフィスの中で冷房が強烈に効いていて、セーターを着ていないと寒い、という環境にも慣れ、家内と二人の生活もやっと落ち着いてきた。

こちらではプラスチック原料の販売に従事している。来星前は語学力に不安があったが、実際は日本人相手の取り引きが多く、九割方日本語で済んでしまう日もある。英語が不得意な分、台湾で少々学んだ北京語が使えるので、中国系の取り引き先には、「日本人なのに北京語が話せるのか。」と喜んでもらえ、親密になれたこともある。英語もたどたどしいながら、結構通じるので助かった。

多民族国家であるこの国の人と会話をする際には、アジアの中の日本の特色・文化をよく知らないと話にならないということを感じている。更に、言葉はあまり通じなくても、心を開いて同じ人間としてつきあえば心は通じるということも日々感じ



ることのひとつである。

今後どこに住むことになるかわからないが、シンガポールで経験したことを生かしていければ、と思う。（一九八六年・国際関係論卒）

自然史博物館より

野本 昌 寛

最近、恐竜がブームである。何処を見ても、恐竜の文字が溢れているが、REX、ジュラシックパーク等の映画のせいもあって、その人気振りは物凄い。誰もがしゃかりきになって恐竜の二文字を追い掛けているのは呆れるばかりである。人気の秘密はよく分らないが、環境問題が大きく取り上げられる今日であるからこそ、大自然の中を自由に闊歩していた恐竜に太古のロマンを求め

ているのではないかと気がする。このところ職場に、恐竜(化石)に関する問い合わせが多い。というのも、縁あって私は今年四月より長瀬にある埼玉県立自然史博物館に勤務しているからである。ここは、地質・動物・植物が三本柱の自然史系の博物館でも、実際恐竜の展示は無いのだが、パレオパラドキシア(哺乳類・海獣)やカルカロドン・メガロドン(サメ)で有名なことから問い合わせてくるのだろう。すでに御覧になった方も多いのではなからうか。両者とも県内で発見された化石をもとに復元した古代の生物で、私は勤務するまではその名前ぐらいしか知らなかったけれども、埼玉県は地質学的に見ても非常に面白い所であることに気付かされた。なぜならごく身近な所に数万年前の生物が眠っているのだから創造力を働かさずにはおられない。

(一九九三年・歴史学卒)

《支部だより》

サマータイムの日々

大塚 秀 見



ドイツで生活して、印象深いことといえば、ドイツと日本では時間の流れ方が違うのではないかとということです。例えば、日本でも導入されたことがあります。そのために、三月の最終日曜日から九月の最終日曜日までの間、時計を一時間進めることとなります。この結果、夏至の頃になると、十時過ぎまで明るいのです。残業が当然の日本でなら、一時間余計に働くことになるだけかもしれませんが、定刻退社が普通のドイツでは、それがいきいきと活用されています。

私が住んでいるのは、マルブルクという小さな町です。その影響もあるのでしょうか、時間の流れがゆるやかに感じられます。石畳の街並は、中世のおもかげを残しており、また伝統を残していこうとする意気

込みが感じられます。

すでに二年間生活してみても、「時間」に対して、いくつもの異なった受けとめかたをしました。最初の一年は、時間がたくさんあるという印象でした。二年目になって、それが普通になってしまい、特別に時間があるとも感じられませんでした。帰国まで一年をきった今は、日本の時間の流れに対応できるのだろうかと考えています。

(一九八二年・哲学思想卒)

第二回

関西支部同窓会の報告

手嶋 葉子

第二回関西支部同窓会は、七月十日、京都「梅むら」の床で行われました。当日朝雨が降り、床は無理なもので？と心配しましたが、小雨が少し降った程度ですみ、また景色も料理も、さすが京都、と思わせるすばらしいもので、幹事としてはホッとしました。おまけに、花火つき、川べりで歌の練習をしている学生の合唱つきでした。

集まった人数は八名。七〇年卒前後の方を中心に、あとは八五年卒が二人。同年代の人の間では、なつかしい話に花が咲きました。先輩方が

在学されていた頃の大学と、自分の在学中とではまるで様子が違うので、話をうかがってただ驚くばかりでした。九時半にはお店を出るつもりが、話が盛り上がり、お店を出たのは十時すぎ。二次会へも、皆そろって行きました。

今回とても残念だったのが、出欠葉書の回収率の悪さと、参加人数の少なさです。葉書は切手つきですし、せめて返事だけはいただきたいと思えます。そして、次回はもっと人数が増え、いろいろな年代の卒業生が集まりますます楽しい会になるよう期待しております。

(一九八五年・中文卒)



関西支部の同窓生(京都「梅むら」にて)

同窓会主催で「就職相談会」開く

在学生に好評、約70人が出席

去る二月六日(土)、埼玉大学に新しくできた学生会館三階大集会室において、埼玉大学教養学部同窓会主催・一九九三年度「就職相談会」が開催されました。

今年就職を希望する教養学部の在学生諸君に、就職活動を前にして、各種業界や官公庁について正しい理解をもってもらい、併せて企業職場の性格や人事採用の現状についても認識を深めてもらうことを目的に、開かれたものです。

そのため、現在各分野で活躍中の同窓生に大学に来ていただき、自ら



真剣に話しを聴く在学生

の貴重な経験をもとに、学生諸君が最も気にしている将来のことについて実際に質疑応答を通じて相談に乗ってもらおうとするもので、いわば、卒業生(同窓生)による在学生のための初めての試みとなりました。教養学部から最初の卒業生が巣立ってからほぼ四半世紀、二年前にもあり、同窓会が設立されたことで母校に何か恩返しが出来ないだろうかと考えた末の企画でした。

しかし、理事会で検討され決定されたのが昨年末のことであり、十分な準備期間を置く余裕は全くなく、ただ開催の日だけが刻々と迫ってくる状況でした。けれども幸いなことに、多くの同窓生の熱意と励ましに支えられ、特に多忙の中ほとんど二つ返事で参加を承諾してくれた卒業生の皆さんの協力により、何とか実現にこぎつけることができました。勿論、大学と諸先生方のバック・アップも忘れることはできません。最初に、武井尚会長からの挨拶の後、五人のゲストによる就職もしくは転職の経験談や企業の側から見た就職・採用の現状が、報告されまし

た。演壇に立ってくれたのは、増渕勝人(84・システム卒)、森田文(92・歴史卒)、阿部一則(87・現社卒)、大野育子(86・現社卒)、内海和之(77・国関卒)の各氏です。

次いで、教養学部の就職資料室に置いてある「同窓会名簿」の活用方法と注意事項について、司会役の松岡眞知子理事(77)より簡単な説明が行われ、後半は、六つの班にそれぞれ分かれ、卒業生と在学生とが文字通り膝を突き合わせて「業種別懇談会」が行われました。学生に最も人氣が高かったのは「官公庁」のブロックで、折原茂晴氏(87・国関卒)ほか同窓生四人に対して、集まった在学生が二十二名。逆に最も低調だったのが、大学院を含む「教職員」のブロックで、安蒜(あんびる)徹氏(84・国関卒)ほか同窓生六名に対して、在学生はわずかに二人でした。一方、「民間企業(メーカー)」、「金融」、「マスコミ」、「流通・サービス」のブロックでは、それぞれ七、八名から十数名の学生諸君が真剣に説明に耳を傾けたり質問をしたりしていました。

同じ教養学部に学んだ先輩たちという気安さもあつたからでしょうが、全体として在学生(三年度生)六八名(男子二十七名、女子四一名)の多数が参加してくれました。これは現



在学生の質問に答える同窓生

在の一学年・一四〇名のほぼ半数に当たる数字です。「このような会を開いて欲しいと前から思っていた」という声を何人も在学生から聞きましたが、特に後半の「業種別懇談会」では、予定の時間をはるかに越えて熱心に質疑応答が続いていたのが、印象的でした。

好評に広えて、来年以降もこの企画を続けて行きたいと考えております。したがって、今後或る日突然、自宅もしくは勤め先の電話に「埼玉大学教養学部」を名乗る女子学生・男子学生からの電話が掛かってくることもあるかもしれません、その時はどうか、適切なアドヴァイスをお願い致します。

当日出席して下さった同窓生二人の記事も、併せてお読み下さい。



感じた学生達の熱気 就職相談会の継続と充実を

大野 育子

就職活動を始めるにはまだ早い、「どうせ学生は二〇〇三〇人しか来ないだろう」と高をくくっていたら甘かったですね。会場に入るなり、学生の多さと彼らの熱気に圧倒されました。懐かしい学内や生協、新築の学生会館を見て学生気分でしたのは束の間でした。

学生が知りたい事を私は話したろうか、言い足りない思いで演壇を降りましたが、懇談会で学生達と話している時、知りたい事や悩み事が自分達の頃と共通しているのを知って安心しました。もっと時間があってらもっといろいろ話し合えたのになと思っただけでしょうか。

ところで、九三年の就職戦線は「厳しい」と言われています。特に女子学生には厳しさが一人です。

私が彼女達にアドバイス出来る事は、これからの人生で、選択や決断・決心、或いは解決しなければならぬ事態に幾度か遭遇し、「就職もそのなかの一つである」ということそして結局は、前向きで強い(心の)人が自分で納得して生きてゆけるということだと思います。少々説教臭いですが、かく言う私もそうありたいと願っている一人です。OBによる就職相談会は初めての企画だそうですが、今後継続し、内容も充実させて、就職部の無い国立大学の先輩・後輩の交流の場として発展して欲しいものです。

(一七八六年・現代社会卒)



「民間企業(メーカー)」ブロックで説明する野村さん。(中央)

就職相談会の印象

野村 俊三

二月六日(土)、同窓会主催の「就職相談会」にオブザーバーとして出席した。

多分、当日の幹事諸兄も同様な感想を持たれたかと想うが、「予想外に、学生諸君が集まってくれたなあ」というのが、私の率直な印象であった。

開始直前までは、「ひよっとしたら、今日の出席者は、主催者より少ないのでは」等と、不謹慎極まりない

軽口を飛ばしてしまっただが、蓋を開けてみると用意した席がほぼ埋まる大盛況!! 聞くところによると、三年生定員一四〇人の内、出席者は六八人とか。

バブルが弾け、企業業績が最悪の年であり、就職戦線が厳しくなるという危機感もあったかと思うが、私が在籍した頃の教養学部では、考えられない参加率であろう。

質問も多岐にわたり、予定時間を超過する程であり、学生諸君の就職に対する関心の高さを、ひしひしと感じた一日であった。

当日のゲストスピーカー及びオブザーバーの情報を参考にして、一人でも多くの学生諸君が、就職活動に取組まれ、成功される事を念じている。

(一九七五年・文化人類学卒)



同窓会の名称「樺(けやき)会」に決まる

去る六月十二日の同窓会総会において、かねてからの懸案であった埼玉大学教養学部同窓会の「名称」が、「樺(けやき)会」に決まり、満場の拍手のうちに承認されました。

以下は、当日総会の席で岡田道程理事(76)により行われた提案理由の抜粋です。

「御承知の通り、樹木というのは大変に生命力が強く、また長寿です。中には数百年、あるいは千年、二千年に及ぶ例も見られ、この自然界の中で最も寿命の長い生き物は、それに肖(あやか)って、末長い発展を願う同窓会の名称として、まことに適わしいものと言いうことができます。古来、長い年輪を刻んだ巨木や老木が神格化されて祀られている理由も、ここにあると言えるかもしれません。同様に、樹木が大に深く根を下ろし、風雪に耐えながら、空に向かって枝を延ばし葉を繁らせる様も、同窓会の発展を象徴するものとなり得るように思われま

す。ところで、我が国の代表的な広葉樹、とりわけここ埼玉や武蔵野の地を代表する広葉樹は「けやき」です。

けやきは大変に生育が良く、生命力に富み、しかも寿命の長い樹として知られています。通常は高さが20〜25mになりますが、中には高さ50m、直径5mに達する巨木もあり、しばしば天然記念物に指定されています。

また「けやき」は何よりも、四季を通じて姿形の美しい樹です。目に滲みるような新緑の春。大きく繁った木蔭に人びとが清涼感とともに安らぎを覚える夏。落着いた彩りの紅葉が辺りの風景と見事に溶け合う秋。箒状に広がる梢(こずえ)の樹形が幾何学的なシルエットを描き出す冬。このように、けやきは四季折々を通じて人びとに親しまれ、それ故詩歌や文学作品にもたびたび登場します。外見だけではありません。切り出した後の木材は保存性に優れ、木目が調って美しいため、盆や漆器の木材から建築・船舶・車両・機械・楽器に至るまで、その用途は限りなく広いと言えます。また十分に乾燥させた後は何十年、否何百年もほとんど狂いが生じないため、特に神社や寺の大黒柱、構造材に併用されていることも注目されてよいでしょう。つまり最も身近にあって利用価値が

高いだけでなく、同時に工芸や芸術作品、時には神聖なものとして利用されているのです。このような多面性・多目的性は教養学部の性格にも通じるものがあるかもしれません。

しかし、何よりも重要と思われるのは、この「けやき」の樹が埼玉大学構内に多数生育していること、周知のように、北浦和駅前から大学の前を通って所沢にまで至る道路が、日本では一番長い、通称「けやき通り」として内外に知られていることでしょう。埼玉県の県木つまり象徴も、やはり「けやき」の樹です。

なお、「けやき」という言葉は

S 伝 言 板 S

★今年で三年目を迎えた埼玉大学教養学部同窓会は、初めての試みとして母校埼玉大学の学生会館で開催されました。同窓会ではこれを記念し、埼玉大学名誉教授・矢沢利彦先生にお願いして、総会及び懇親パーティーに先立ち「記念講演」を行いました。先生には直前になって御無理なお願いをしたにもかかわらず、快くお引き受けいただいたこと、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

「けやき木」、すなわち顕著に目立つ木という意味に由来すると言われていることも、最後に一言付け加えておきたいと思います。

以上のような理由から、埼玉大学教養学部同窓会の名称を「樺(けやき)会」とするよう、提案申し上げます。

どうか今後末長く、特別会員の先生方と同窓生一人一人の手で、この「樺(けやき)会」を守(も)り立て、立派に大きく育てて下さるようお願い申し上げます。

矢沢利彦先生は東洋史、特に東西文化交流史が御専門で、近くは『中国とキリスト教』(一九七二年、近藤書店)、『北京四天王堂物語』(一九八七年、平河出版社)の御著書や、『イエズス会士中国書簡集』(八冊、一九七〇〜八〇年、平凡社)、セミナー『チナ帝国誌』(一九八三年、岩波書店)など多数の翻訳を出版されております。

当日行われた記念講演「お茶を中心とした東西の文化交流」は、そのような先生の長年にわたる研鑽と学識に裏付けられた格調の高いものでしたが、しかし決して専門的な堅苦

しい話ではなく、反対に「イギリス人はどうしてお茶大好き人間になったか」という最初のテーマに見られるとおり、お茶（緑茶・中国茶・紅茶）をめぐる世界的規模で展開された経済的・文化的交流の歴史を、巧みな話術で誰にでも分かるように語って下さいました。ここでその内容を再現することはできませんが、この講演に最も関係の深い御著書として、『東西お茶交流考』（東方書店、二二三頁、一〇〇〇円）があります。以前、各新聞の読書欄でも一斉に取り上げられた本で、日頃何気なく飲んでいる一杯の「お茶」にどれほど大きなドラマが隠されているかを、教えてくれます。

なお、矢沢先生は今回の講演に基づいて続編の執筆にかかっておられることも、御報告させて頂いたと思います。齢（よわい）八十になろうとしておられますが、益々の御活躍をお祈り致します。

★「やぶれ傘」は、岩本泰波先生がここ数年書き留めてこられた私家版「やぶれ傘」から抜粋されたものです。先生は長年にわたり宗教学・仏教学を研究され、とりわけ仏教とキリスト教との比較研究、親鸞と道元の宗教思想について多くの優れた業績を残してこられました。一見何気ないこれらアフォーリズム風の歳

言にも、根底には先生のそのような「宗教哲学」が息づいているように思われます。

なおこの「やぶれ傘」は、形を変えて目下刊行に向けて準備が進められている、と仄聞しております。一日も早い上梓を心待ちにするともに、明治・大正・昭和・平成の激動の歴史を身をもって生きてこられた先生の、益々の御壮健と御活躍をお祈り致します。

また、埼玉大学教養学部教授林進先生の御退官が近づいておられるとのこと、教養学部の歴史と共に歩まれた先生であるだけに、淋しさを禁じ得ません。教養学部の発展に尽された先生の御努力に感謝し、引き続き今後とも「同窓会」を御指導下さるようお願い致します。

★「声の欄」の中に出てくる埼玉県立「自然史博物館」（秩父郡長瀬町長瀬一四一七一、TEL〇四九四一六六一〇四〇四）は、秩父鉄道で上長瀬駅下車・徒歩五分、あるいは国道一四〇号・長瀬入口アーチより五〇〇mのところにあります。月曜休館。入館料は一般一〇〇円、学生・生徒・児童五〇円。行楽の帰りなど、ふと立ち寄ってみてはいかがでしょう。

★「民族学最後のフィールド」と

言われる性をテーマとした国立民族学博物館の共同研究の成果が、『性の民族誌』（人文書院・A5版、三百八十九頁、三千九百十四円）として刊行されました。共同研究に当たったのは「性と文化表象に関する比較研究一班（二十四人）」で、その代表者が同博物館の須藤健一助教授（現在、神戸大学国際文化学部教授）です。須藤健一氏は教養学部の第一期生（一九六九年・文化人類学卒）であり、昨年、「同窓会だより」第二号に原稿を寄せてくれたほか、関西支部担当幹事として日頃から同窓会を支えてくれております。今後の活躍を期待します。（資料提供・朝日新聞）

★今春に埼玉大学を退官された暁峻淑子先生とゼミの先輩・後輩とで『豊かさへの接近』（暁峻淑子編、産業統計研究社）という本を出版しました。私は「自治体改革と女子労働」というテーマで執筆し、他に埼玉大卒の新進気鋭の大学教授の論文が収められています。最寄りの書店から取り寄せられるので、是非お読み下さい。特に高校の先生をなさっている方は、消費者教育などに役立つ本なので、学校の図書館に置いていただければと思います。（秋山悟、一九八四年・システム卒）

★昨年、埼玉大学教養学部同窓会

の中に「マスコミ部会」が設立され、第一回の会合で部会長に奥野昌宏氏（一九六九年・現社卒）を選出した後、夜遅くまで懇談が続きました。各新聞社・出版社から放送関係に至るまで、各分野で活躍する同窓生が業種や企業の枠を越えて相互に親睦を図り、併せて情報交換のネットワークづくりを進めようとするものです。今年も九月十八日（十九日、日本新聞協会「湯河原荘」で開催されました。首都圏だけでも百名近い関係者がいるとのこと、今後の活動が期待されます。

連絡先は、山口民雄氏（一九七一年・日文卒、日本工業新聞社）勤務先03-3222-17244、松岡真知子さん（七七年・現社卒、スタンダード通信社）自宅03-15470-11631です。



新会費納入システム導入のお願い

埼玉大学教養学部同窓会事務局

早いもので当会も来年四月には設立四年目を迎えます。さて総会や同窓会だけで日々お知らせしている様に、会運営の基盤たる財政面に関しては創設期ということもあり未だに常時活動資金不足が続く不安定な状態です。これは、(1)会員数自体が約三千名の小さな規模であること、(2)会運営の基盤となる名簿や管理用品等に対してはしばらく初期投資が必要な段階を脱していないこと、(3)別表の通り会費を納入した正会員が

| 卒年 | 総員数 | 納入者数 | 納入率 |
|----|------|------|-------|
| 69 | 80 | 49 | 61.3% |
| 70 | 83 | 33 | 39.8% |
| 71 | 97 | 33 | 34.0% |
| 72 | 79 | 24 | 30.4% |
| 73 | 85 | 28 | 32.9% |
| 74 | 88 | 32 | 36.4% |
| 75 | 93 | 41 | 44.1% |
| 76 | 74 | 29 | 39.2% |
| 77 | 111 | 34 | 30.6% |
| 78 | 94 | 31 | 33.0% |
| 79 | 119 | 36 | 30.3% |
| 80 | 112 | 40 | 35.7% |
| 81 | 126 | 31 | 24.6% |
| 82 | 96 | 8 | 8.3% |
| 83 | 132 | 28 | 21.2% |
| 84 | 137 | 36 | 26.3% |
| 85 | 123 | 36 | 29.3% |
| 86 | 129 | 32 | 24.8% |
| 87 | 141 | 20 | 14.2% |
| 88 | 131 | 33 | 25.2% |
| 89 | 134 | 34 | 25.4% |
| 90 | 142 | 25 | 17.6% |
| 91 | 140 | 45 | 32.1% |
| 92 | 133 | 73 | 54.9% |
| 計 | 2679 | 811 | 30.3% |

だ過半に満たないこと、(4)総会など規定の会費以外に運営資金を確保できる活動がまだ機能を果していないことなどの理由によると思われ、さらにはスタッフ自体も未だに設立当初からの世話役の諸兄のボランティアに大きく依存したままで来ております。その上一九九四年には会の運営経費に大きな比重をしめる郵送費が値上げされます。以上の様な状態では今後、会の存続にも大きな不安があると云わざるをえません。

さて来会計年度は設立から三年を経過したことで、再度の会費徴収の年度となります。当会では前回の総会及び数度の理事会で検討した結果、この機会をとらえ財政の改善と会費納入促進を推進するために新たな会計制度を導入することになりました。現行制度との大きな変更点は以下の通りです。

新会計制度の骨子

- (1)会費は一年毎に納入するものとし、会計年度始めの四月をその時期とします。
- (2)納入方法は会員希望の金融機関の口座から自動振替によるものとなります。
- (3)郵便局以外ほとんどの民間金融機関からの自動振替が可能です。振替経費は会費から充てたいします。
- (4)今まで明細が不確かであった納入金を、会費と入会費に区別します。
- (5)入会費は五千元、会費は年三千五百円とし新卒者は初年度の会費は免除されます。
- (6)導入に際しての期限の経過措置として、一九九二及び一九九三年度からの会費納入者には一九九二年度は一年間分、一九九三年度は二年間分、会費は免除といたします。また一九九四年新卒者も本会計年度を適用いたします。
- (7)名簿は特別会員及び二年以上継続して会費を納入した正会員に送付するものとなります。但し入会費を納入する一九九四年以降の新卒者に対しては、その時点での最新刊の名簿を贈呈するものとします。またすでに一九九一年以前に卒業していた正会員で一九九四年三月末日までに会費納入しなかった会員が新たに会費納入を開始し名簿を受け取る場合は、納入開始初年度は入会金とその年度の会費を同時に納入していただきます。
- (8)この制度は一九九四年四月一日から適用されます。(なお、第一回の引落しは五月十日を予定していただきます。)

一九九四年からは郵政制度の変更によって現在の郵便振替システムでは、会員各位での会費納入関係費用増加となりそうな情勢です。今回提案の新たな会計システムではJCBの集金代行業務を会費納入に使用することで全体としては安価に会計業務が行なえ、会員各位での会費納入の事務的繁雑さもなくなります。また新卒者が正会員としての会費納入時の一時金負担が現在の一万円から五千円へと大幅に軽減されることにより、会費を納入していただく正

会員増加の促進にもつながることが期待できます。またこの機会をとらえ名簿情報捕捉の精度を上げ、データベースの内容を充実させ会員相互の交流に役立てていきたいと思っています。さらにこの会計制度により一九九四年春から会費が自動振替となることによって、予算の計画的な運用が可能となり、会の維持と名簿の三年毎の発行が何とか可能となります。

会の名称も「樺（けやき）会」と決り、ますます今後の息の長い活動が望まれるところです。皆様にもこの間の事情をご理解いただき、新たな会費納入制度にご協力をお願いしたく思います。またこの制度に対してのご意見やご提案などがございましたら書面にて会事務局までお願いいたします。今後留守番電話や

ファックスなどの備品を揃え、効率のよいコミュニケーションをはかりたいと考えています。



就職相談会開催のお知らせ

一九九四年度同窓会主催「就職相談会」の開催が、一月二二日（土）一時半～三時半、大学会館に決まりました。今回は就職雑誌、日経「アドレ」の編集長榎木誠さん（一九七〇年・中文卒）に基調報告を行ってもらう予定です。卒業生で相談役を引受けて下さる方を求めています。御連絡下さい。

※連絡先 武井尚（☎〇四八〇一21一五七六）

1992年度会計報告

同窓会会則第17条の規定に基づき、総会に報告され、了承された1992年度会計報告は以下のとおりです。

| | | |
|--------|--|--|
| 収 | 入 | 2,854,339 |
| | 会費 雑入 繰越金 入（預金利息、寄付） | 1,640,000 1,208,818 5,521 |
| 支 | 出 | 2,070,713 |
| | 事務費 | 271,167 |
| | 会議費 | 23,960 |
| | 事業費 総会開催費 同窓会だより印刷費 就職相談会費 パソコン購入費 | 1,775,586 874,543 351,159 39,884 510,000 |
| 次年度繰越金 | | 783,626 |

連絡先不明者リスト

一月一日現在
()内は旧姓

一九六九年卒
 日文 本多水美
 国 伊藤洵
 国 加藤基
 米 紀直邦
 米 石垣(小池) 範子
 現 豊島健一
 文人 長谷川淳一
 現 松坂春実
 現 矢野(三村) 武男
 日文 山口和夫

一九七一年卒
 国 土井純雄
 文人 秋山好子
 国 熱田恵子
 自 阿部和男
 国 新井光久
 国 内海敬子
 文人 神谷(小川) 陽子
 文人 寛美晴
 日文 金久保伸一
 米 北原幸男
 米 小林正雄
 米 近藤均一
 米 境井庄三
 国 佐竹雅子
 日 佐藤恵子
 日 嶋田啓子
 文 仲西(島田) 礼子
 現 清水信彦
 自 菅原四郎
 自 鈴木治孝
 自 高田茂穂
 現 高野幸男
 中 竹中文雄
 国 飛沢純男
 現 仲西宗一
 自 浪江勉
 自 根岸俊一
 国 原島吉光

自 樋口伸司
 自 深谷猪次郎
 文人 高梨(藤代) 美代子
 国 棒葉哲朗
 自 前田豊
 現 水池照美
 国 南義清
 現 森塚美枝子
 米 山口孝
 国 横山久
 一九七二年卒
 現 池田正晴
 国 江藤幸作
 国 大野耕一郎
 自 小沢幸男
 自 神山久男
 自 駒沢昭政
 現 佐藤正則
 自 沢田直人
 自 下川昭三
 文人 鈴木良範
 現 田畑則重
 文人 黒木(田村) ゆり
 現 上野(坪井) 真理子
 自 時枝良次
 自 永井章司
 日 中川信
 自 夏莉祐子
 自 原木真
 自 樋口幸子
 英 兵藤秀明

シス 松崎保美
 日 水谷まち子
 現 山岸美昭
 日 山本昭夫
 一九七三年卒
 歴 石井純
 自 石島利男
 日 板橋久夫
 国 板本利行
 現 薄井謙一
 自 内田誠二
 現 大里康雄
 自 大島章男
 自 尾上友章
 自 柏木高行
 日 木村和夫
 中 小池隆夫
 日 小関文夫
 自 後藤則道
 国 塩本昇
 国 四方明夫
 現 清水茂則
 現 高木俊夫
 自 田口常温
 自 多辺田三郎
 自 西田秀一
 哲 沼倉哲夫
 自 野田坂博伸
 自 榎貝良
 自 松橋和男
 自 星野富夫

現 松原等
 英 室田隆
 国 森敏郎
 自 山下保治
 現 湯沢民義
 日 横溝賢介
 歴 吉田共男
 一九七四年卒
 現 飯塚明
 日 岩本重雄
 自 内垣澄子
 自 大川哲夫
 自 大沢徹
 歴 大野徹
 自 尾形義夫
 自 小倉茂
 自 角口和憲
 自 兼子俊一
 現 栗原秀樹
 歴 後藤務
 自 小林昭仁
 自 小林正嗣
 現 坂村佳子
 歴 鈴木由紀夫
 自 土屋立行
 自 角田正英
 日 永山利勝
 シ 成田透
 地 樋口忠茂
 文人 平野芳裕

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----------|--------|-------|------|------|----------|----------|-------|-------|-------|----------|------|-------|------|------|------|----------|-----------|------|--------|----------|--------|------|----------|------|-------|------|------|----------|----------|--------|--------|--------|
| 英 | 現 | 独 | 現 | 日 | 英 | 現 | 歴 | 米 | 米 | シ | 哲 | 日 | 独 | 文 | 文 | 国 | 哲 | 現 | 現 | 歴 | 日 | 英 | 現 | 日 | 文 | 文 | 日 | 現 | 日 | 文 | 哲 | 日 | 一九八一年卒 |
| 柳沢裕 | 小林(谷中)摩利子 | 宮本一人 | 湊義典 | 丸山真一 | 藤本賢一 | 牧野(藤塚)洋子 | 西谷地晴美 | 遠矢兼明 | 田中順 | 滝本滋 | 高橋裕 | 高橋敏明 | 高橋敏一 | 宗立人 | 杉山祐子 | 清水小波 | 清水和宏 | 笹岡清 | 小松真生 | 岸正通 | 小林(岡部)恵子 | 大野恭代 | 大沢敬 | 岩瀬隆 | 石川健介 | 井口鉄也 | 荒山広美 | 秋山秀一 | 西卷洋次郎 | 西卷洋次郎 | 一九八一年卒 | | |
| 歴 | 中 | 現 | シ | 現 | 日 | 米 | 米 | 日 | 国 | 現 | 英 | 哲 | シ | 現 | 現 | 英 | 自 | 文 | シ | 哲 | 国 | 国 | 現 | 歴 | 日 | 国 | 国 | 日 | 文 | 文 | シ | 国 | |
| 山崎幸一 | 三宅江 | 味野和紀作 | 溝上啓智郎 | 松本永司 | 本宮広 | 藤本(磯野)市子 | 福島(藤江)幸子 | 能登谷良毅 | 庭山二郎 | 中野正久 | 中野弘美 | 中沢則夫 | 内藤衡一郎 | 須藤明 | 除川哲朗 | 佐藤幸雄 | 佐久間功 | 小林成信 | 熊谷瑞彦 | 清常雅史 | 菊地敏雄 | 川村康志 | 神沢靖 | 勝田(松井)敏恵 | 岡村和人 | 安斉泰男 | 荒山広美 | 秋山秀一 | 西卷洋次郎 | 西卷洋次郎 | 一九八二年卒 | | |
| 国 | 国 | 国 | 国 | 現 | 日 | 日 | 国 | 現 | 現 | 日 | 現 | 国 | シ | 国 | 自 | 自 | 文 | 国 | 現 | 自 | 国 | 現 | 中 | 英 | 自 | 日 | 国 | 国 | 国 | シ | 米 | 一九八三年卒 | |
| 原山かおる | 丹羽信彦 | 仲倉近子 | 田中慎一 | 館野功 | 竹安克哉 | 砂川貞次 | 菅野隆 | 須賀隆司 | 重野幸夫 | 佐藤貴裕 | 桜田雄幸 | 桜井敦 | 榎原恵里 | 小村啓之 | 岸本福子 | 神田正人 | 横山(川村)裕子 | 田口(金山)むつみ | 加藤宏 | 鍛冶俊樹 | 角田隆一 | 押久保隆 | 岡宏司 | 大塚恭司 | 大泉範次 | 海老原智子 | 榎本俊也 | 上山勉 | 岩元剛 | 阿部公子 | 一九八三年卒 | | |
| 哲学 | シ | 哲学 | シ | シ | 日 | 歴 | 文 | 哲学 | 国 | 現 | 哲学 | 国 | 独 | シ | 哲学 | 中 | 日 | 現 | 現 | 現 | 現 | 現 | 現 | 日 | 中 | 国 | 現 | 国 | 日 | 英 | 国 | | |
| 藤原慎太郎 | 平松尚 | 中山恒之輔 | 中根博昭 | 中島誠 | 長井政司 | 道用雅浩 | 鈴木真理子 | 白井晃 | 志村直宏 | 重松義人 | 古賀豊 | 木村健一 | 木谷亨 | 岸下誠 | 宇野玲二 | 猪狩尚人 | 荒川恒一 | 網野環 | 青貫利夫 | 一九八四年卒 | 横山庸子 | 山本彰子 | 柳沼久裕 | 村田仁 | 箕輪浩徳 | 松本俊郎 | 松原雅之 | 淵上雪湖 | 大塚(半田)久子 | 大塚(半田)久子 | 国 | | |
| 哲学 | 地 | 一九八六年卒 | 哲学 | 現 | 現 | 現 | 現 | シ | 国 | 国 | 国 | 現 | 現 | シ | シ | 文 | 米 | 日 | 文 | シ | シ | 現 | 現 | 国 | 哲学 | 地 | 文 | 自 | 文 | 国 | 国 | | |
| 毛塚耕史 | 神部栄一 | 若山寛史 | 若山寛史 | 吉田匡志 | 山本和彦 | 山田治彦 | 山田治彦 | 福田修 | 花澤喜久雄 | 東海林康子 | 矢高(鈴木)康子 | 椎名誠 | 佐野重行 | 坂本明子 | 坂口勝博 | 桑川和久 | 北爪真実 | 稲垣達也 | 会田浩 | 饒平名拓 | 佐藤隆 | 一九八五年卒 | 和田照幸 | 山浦弘晴 | 向井明子 | 宮本みどり | 峯田淳 | 牧野章子 | 細野幸隆 | 国 | | | |

同窓会活動報告

(92・10～93・9)

- '92・10・2 「同窓会だより」第二号編集打合せ(於浦和「蔵王」)
- 10・31 第二回理事会(於北浦和埼玉県労働会館)。「同窓会だより」編集他。
- 11・28 第三回理事会(同前)。「同窓会だより」第三号発送・今後の事業内容の検討。
- '93・1・22 第四回理事会(於池袋談話室滝沢)。「就職相談会」の運営打合せ。
- 2・6 就職相談会(於埼玉大学学生会館)
- 3・6 第五回理事会(於北浦和埼玉県労働会館)。「就職相談会」・'92年度会計報告、第三回総会他協議。
- 3・24 新卒業生入会勧誘(於浦和東武ホテル謝恩会会場)
- 4・17 第六回理事会(於北浦和埼玉県労働会館)。
総会運営・'93年度活動方針、会費納入方法等

協議

- 5・21 第七回理事会(於池袋談話室滝沢)。総会の運営協議。
- 6・12 第三回総会・懇親パーティー(於埼玉大学学生会館)。

§ お 願 い §

同窓会では、六月十二日の「総会」に先立ち、朝日・読売の各新聞の「同窓・名簿づくり」の欄に、掲載しました。わずか数行の記事であり、今回は残念ながら、同窓会の存在すら知らない連絡先不明の同窓生からの問い合わせはありませんでしたが、今後でもできる限り続けて行きたいと思えます。

今年も、住所が変わるたびに通信物がだいたい返送されてきております。知り合いの方には連絡先不明者(12～15ページ掲載)の情報を少しでもお寄せいただきたいと同時に、住所等連絡先が変更となった場合には、「葉書」にてすぐに御連絡下さるようお願い致します。(下宿や寮にお住まいの方は、御実家の住所でも結構です。連絡先が一定せず住所変更届も出されていないと、郵便物はすべて届かず無駄になってしまいま

す。

連絡先は次のとおりです。
〒338 浦和市下大久保二五五
埼玉大学教養学部気付
埼玉大学教養学部同窓会事務局

§ お知らせ §

郵便振替の口座番号が一九九四年五月から左記のとおり変更になりました。
(新しい口座番号)
〇〇一九〇一四一七〇〇四二二

加入者名

「埼玉大学教養学部同窓会」

募 集

同窓会だよりの中の「声の欄」と「伝言板」の原稿を募集しております。

「声の欄」は、学生時代の思い出、近況報告、同窓会に期待することなど内容は自由です。六〇〇字以内(できれば縦書、ワープロ可)、次の締め切りは来年の九月七日です。原稿には題名と名前、末尾には卒業年次とコース名を記し、宛先は、埼玉大学教養学部同窓会事務局「同窓会だより」係まで。写真を同封して

いただければ一緒に掲載します。多くの方々、特に地方や海外にお住まいの方からの投稿をお待ちしています。

編 集 後 記

同窓会だよりの名前が「けやき」に決まりました。さらに親しみやすい内容をめざしたいと思えます。御協力お願いいたします。

今号の編集から、あらたに紅一点の森田文さんに御協力いただくことになりました。次号の「けやき」に御期待ください。

編集・武井尚(70日文)、櫻井雅英(74現)、石田義明(75国)、岡田道程(76哲)、兼子順(77日文)、萬年拓郎(85国)、森田文(92歴史)。
編集顧問・榎木誠(70中)、松村久(71中)。

